

# 祖父が残した宝物

一宮市立南部中学校二年

日置

栞那



みなさんは認知症と聞いてどんなイメージをもっていますか。「大変そう」「めんどうくさそう」などとマイナスなイメージをもっている方が多いと思います。私も以前まではマイナスのイメージの方がとても強かったです。でも、そんな私のイメージを変えてくれたのは私の大好きな祖父でした。

私の祖父は優しく、とても穏やかでどちらかというと物静かな人でした。そんな祖父が少しずつ変わってきたのは、私が小学校五年生の頃でした。認知症というものは突然やってくるもので、穏やかだった祖父が急に怒りだすということが多くなりました。昼夜逆転や物忘れなどがどんどん進行していきました。

私も祖父の変化にとまどい、家族も変わってしまった祖父を見て、悲しくなったり、苦しかったりした時もありました。でも、そんな祖父と前向きに明るく向きあうことにしました。それまで口数が少なかった祖父ですが認知症のおかげでいろんな話を私に聞かせてくれました。例えば、自分が小さい頃の話や戦争の話、ときにはぐちななども聞かされたことがあります。その中でも一番印象に残っている話は、祖父の小さい頃に起きた珍事件のお話です。祖父は小さい頃よく家の近くにある川で水遊びをしたり、魚を捕まえたりしていました。とてもやんちゃだった祖父は調子に乗り過ぎたのか川に流されてしまったのです。「水を大量に飲んでお腹がパンパンになったんだぞ。」と少年のように目をきらきら輝か

せながら話してくれました。認知症はほとんど子供の頃の自分に戻ってしまうという特徴をもっています。でも、認知症だからこそ昔の話を聞いて祖父のことをよく知ることができました。

それでも、やはり認知症の人を支えながら生活をすることは大変なことです。一番大変だったのは、朝と夜の逆転。私達が寝た頃に急にむくつと起き出して部屋中の電気をつけだしてしまうのです。私の母はそんな祖父を毎晩、毎晩、なだめて寝かしつけていました。素直に納得する日もあれば、納得しない日もある。自分の意思が通らないと夜中に大声を出して騒いでしまうような日もありました。そんな祖父に対する接し方で絶対には守らなければならぬルールが一つありました。それは「祖父の意見を否定しないこと、できるだけ肯定側になつてあげる。」ということです。正直、私もめんどうくさいなと思ってしまうことがありました。私達から見たら祖父の行動は変わっているのかもしれないけれど、祖父にとつたら当り前のことをしているだけなのに、なぜ文句を言われるのかと感じてしまうからです。だから、絶対に祖父の行動や言動に対しては文句を言わないようにしていました。認知症の人を支えている周りの人達が考え方や接し方を変えるだけで、認知症の人と過ごす時間がとても楽しく変わると思います。認知症は治すことのできないもので、私が中学校へ入学する頃には、ほぼ寝たきりの状態に近い状況でした。そんな中、祖父は老人ホームに通うことになりました。それまで寝たきりに近かった祖父は友人もでき生き生きとしてきました。そこで出会った一番の友人は耳の聞こえないおばあさんでした。祖父はそのことを知っているのか知らないのか毎日必死にしゃべりかけていたということです。最近見られなかった祖父の笑顔をまた見ることができて、うれしくて感動したことを今でも覚えています。

私は、認知症の祖父と過ごした四年間、人間としてとても多くのことを教えてもらいました。認知症の人に対する考え方も大きく変化しました。祖父は今年の春に天国へと旅立ちましたが私や家族にたくさんのお宝



物を残してくれました。私は祖父がいなかったら今ごろ福祉について深く考えていなかったと思います。祖父が残してくれた宝物、それは誰にでも優しくすることができると言える福祉の心。祖父が残してくれた宝物とともに祖父はいつまでも私達家族全員の心の中に生き続けています。

家族の中に認知症の人がいるという人は、多いのではないのでしょうか。想像以上に、大変な介護に疲れたり、悩んだり。そんな人に私は心に留めておいてほしいことがあります。それは、認知症の人と過ごす日々こそ本当の宝物だということを。